

# 府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報  
2009年 冬号 1月14日発行/季刊  
発行人：竹内 章  
連絡先：府中市分梅町 1-20-3  
TEL 042-364-3428



## 年頭のご挨拶と展望

NPO法人  
府中かんきょう市民の会  
理事長 竹内 章

新年あけましておめでとうございます。昨年はサブプライム問題を発端に世界的な金融危機に見舞われ株価は大幅に下落し、さらに原油高が物価高騰を招き庶民の生活に影響が出はじめております。

このような時期に、私たち「NPO法人府中かんきょう市民の会」はお陰様をもちまして、今年の4月で会発足満10周年を迎えるにことになりました。

この間、地元の貴重な自然や景観を末永く後世に伝えていきたいとの思いで、農地をお借りして「ふるさとレンゲまつり」の開催や、親子で参加できる「田んぼの学校」を

はじめ「小川の生き物調査」など、自然を対象にした事業を毎年開催して参りました。これらの企画は府中市の市民環境学習の一環として市の後援や委託事業として市と協働で実施しております。

府中市は昨年多摩地区としては初の「景観行政団体」となり、景観条例の改正や「府中市景観計画」の策定を行い、5カ所の「景観形成推進地区」を設定するなど、自然や景観を大切にする行政計画を進めており、私たちの思いが少しずつ伝わってきていると実感しております。

その一方で、「けやき並木沿いの高層マンション建設」や「府中基地跡地のバイオ研究施設移転」など市民を悩ます諸問題も発生しております。このような問題にも積極的に拘わりを持ち、環境市民団体としての責任と役割を果たして参りたいと思います。

府中市は都区内に比べれば、まだ緑や農地が多く残されております。いま残されている貴重な自然を少しでも多く後世に残して行けるよう、会員一同これからも力を合わせて努力して参りたいと思っております。



府中かんきょう市民の会創立十周年記念の望年会に集った会員とご支援いただいたみなさん  
…十一月七日、ルミネール府中で 関連記事は6頁



## 連載終了にあたって

3年前から府中市内で散見されるゴミの不法投棄や見苦しい景観風景などについて写真で示しながら、問題点を指摘するかたちで15回にわたり連載を行ってきたところですが、15回をもって終了させていただくことになりました。

「市民の目」という常識的な目線から問題を指摘したのですが、こうした問題の指摘にたいし行政も改善の約束や、な

かには直ちに改良を実行してくれるなど、それなりにインパクトを与えることができ、環境改善に一役買えたのではと自負しております。

しかし、なかには問題の背後に行政の執行体制の不十分さや予算不足、さらに将来的な政策テーマとして放置されているといった様々な「壁」も感じる事ができました。連載がこうした点について、今後さらに改善されることや、本格的な取り組みにつながるきっかけになれば、目的は達せられたのではないかと考えています。(羽尻 元彦)



# 収穫期の 田んぼの学校2008

## 稲刈りとハサかけ … 第5回

田植えと並び、稲刈りは「田んぼの学校」の目玉授業である。雨続きで天気予報を気にしながら、田んぼを事前点検したら田んぼに水がたまり、稲刈りどころではなく、水抜き水路を掘るはめに…。当日は晴れたものの、ぬかるんだ田は長靴がめりこみ抜けにくい。悪条件での作業となった。

4年目だが、泥田での稲刈りははじめてだ。刈り取っても、その場で束ねることもできず、足場板らしいものを探して、田んぼに敷く。その上を手渡しリレーで刈り取った稲をあぜまで運ぶ。みな真剣で、誰いってもなく自然に作業分担ができたのには感心した。束ねる作業とハサかけは保護者中心に分担。当初、作付面積の半分くらいしか刈り取れなく、後日スタッフで始末をしなければと考えていたが、みなガンバリで、時間内に終わることができた。農作業はいつも晴れた日ばかりでないのだという当たり前のことを、実感してもらったこともひとつの成果ではなかったか。(9月27日 81名)



刈り取った稲を乾燥させるため「ハサかけ」する

## 脱穀・モミ摺り作業体験 … 第6回

刈り取った稲から、食べられる米にする作業。脱穀とモミ摺りを体験したいとの希望に応え、生徒の自主性に任せる自由参加の授業とした。前日まで雨が続いたことで、出足が鈍いのはどの予想に反し、親子ほぼ同数の参加で、親の関心も相当高いとわかる。

今回は午後からの授業とし午前中は天日乾燥にあてた。稲の乾燥が不十分だと、カビが生えることを考慮したものだ。大学農場には、稲束を手で挿入する旧式の脱穀機がある。モミ摺り機も同様、学生の実習用なので作業しながら原理を学べる。わかりやすい構造のものだ。当日は脱穀日和となり、青空のもとで、のびのびと作業できた。

田植えのように全員一斉の作業はできず、一人ずつ交替する。最初はおそるおそるの作業も、慣れて要領がわかると積極的に作業を手伝ってくれた。モミ摺り作業は粃をモミ摺り機まで運んだり、中にはバケツ稲のマニュアル通り、昔ながらのすり鉢で玄米にする。ビンに玄米を入れて太めの棒で突いて精米を体験するもの、また脱穀で出たワラで藁細工するグループ、粃すり機から出る粃ガラをせっせと集めて清掃するものなど、それぞれが初体験を楽しんだようだ。収量は玄米で65kg、精米して50kgの収穫があった。(10月11日 65名)

## 収穫祭・修了式 … 第7回

最終回は中央文化センターの大広間と料理室を借り切り、総勢100名を超す参加で大盛況の収穫祭となった。

今年は生徒のほかにも両親や家族での参加が多く、賑やかに行われた。おにぎりや豚汁調理を体験後、開会にあたり、市長の祝電披露、鈴木環境安全部長、千賀教授への挨拶を受け、自分たちで作ったおにぎりの昼食時間。おにぎりは塩鮭、シソと炊き込みわかめの3種、豚汁には地元産にこだわり、畑の学校で作った大根、人参、里芋などを使い、安全な食糧確保や自給率の話題づくりとした。

食後「悠学の会」の協力で6回までの映像記録を上映、続いて体験の感想発表。そして修了式。家族と言っても生徒と同年代の子どもも多く、式中、演壇を駆け回るなど騒々しい雰囲気で行われた。中には参加されたはずが、修了証書授与の時には行方不明?…実は隣室で、学生スタッフのワラ馬づくりに熱中してたとか。生徒でもない子供に、証書をねだられたりのハプニングもあった。最後は収穫米、寄贈飲料、特製カレンダーや地元産の禅寺丸柿の副賞を手渡した。(11月1日 102名)

(進藤礼治郎)



収穫祭ではみんなで作ったお米で「おにぎり」をこしらえた



# NPOまつりと私達の活動

今年も府中市が主催する「NPO・ボランティアまつり」が昨年11月15日(土)～16日(日)の2日間グリーンプラザ、駅前広場を中心に、府中かんきょう市民の会をはじめ、49団体が参加して賑やかに行われました。

このように多くの市民の参加をみたのは、「まつり」を主催する市の市民活動支援課が半年以上前から熱心に市民団体と打ち合わせを繰り返し、まつりの機運を盛り上げることに成功したからだと思います。

当会は、今年は「畑の学校」を市民にPRすることとし、11月15日は「畑の学校」で収穫した野菜をそのままドーンと展示して来場者の関心を集めました。多くの市民から、畑の学校に「興味がある」、「見学したい」、「参加したい」という言葉を幾つかもらい、やはり地道な取り組みが成功に繋がるのだと意を強くしました。



子どもたちに人気の紙飛行機づくり

11月16日は昨年と同じく「親子で紙飛行機を作ろう」をテーマに、子どもには飛行機を作らせ、大人には当会の活動ぶりを聞いてもらう企画を進めましたが、当日は生憎、小雨の1日となり子どもの来場が少なく、また午後有名人による「トークショー」があり、親子がそちらに流れ、昨年のような賑わいは見られずスタッフが張り切っていただけに、少しガッカリというところでした。しかし100機用意した飛行機のうち70機を作り終え、親子に喜ばれたので、この企画もまずは成功かと思っております。



「畑の学校」の収穫物が並べられ、市民の関心をひいた

最近2年間のまつりの結果を総括してみますと、府中かんきょう市民の会の活動を市民にPRする場として、このように市が主催するイベントには出来るだけ参加し、地道にPRを続けることで少しずつ市民の認識が高まっていくのだという実感を持たれたことと、市民がより関心を持つイベントは何だろうと会員みんなで話し合っ、それを実行に移していくことが大事だと痛感しました。

「地道な努力こそ成功の早道」。この言葉を忘れないよう、今年も頑張りましょう。(羽尻 元彦)



## ケヤキ並木保全と マンション計画

# 景観行政、新たな課題浮き彫り

2008年秋号で、住友不動産(以下事業者)が丸正跡地に計画する高層マンションに対して「景観形成推進地区」であること、景観行政団体として新たにスタートを切ったことなど、地元住民をはじめ、市民やマスコミからその行方が注目された。その後の経過と問題点について検討する。

高さ45mの巨大高層マンションは府中のシンボル、ケヤキ並木にそぐわないとして、周辺住民を中心に「府中のけやきを守る会」(以下守る会)を結成した。守る会の前身は11年前、スーパー丸正のビル建設に際し、駐車場の排ガスでケヤキが汚染されると、見直しを要望し、設計変更させる成果をあげ、行政関係者からも高く評価されたという。

この計画が浮上した昨年夏以降、守る会は事業者にたいし10数回の交渉を重ねながら見直し要望を行うとともに、署名の呼びかけ、公聴会の意見陳述、市議会への陳情、市長要望や担当部課との話し合いはなんと150回に及ぶという。

### 事業者の頑な姿勢を変えた市民の力

当初、事業者は市民要求を一顧だにしない態度を取り続けたが、正当な意見を無視できず、14階から12階に、高さ45mを39mに変更した。しかし、依然としてけやきの2倍の高さには変わりなく、採算上、これが限界と繰り返すばかりだった。

昨年10月24日、景観審議会(以下審議会)はケヤキは日影に弱い生育特性をもち、並木保全上、高さ抑制を求める等4項目と付帯意見を市長に答申した。これを受けて市長は、事業者に助言を行った。この助言に対し、高さ1m弱下げたのみで「高さを抑えると共に建物形態に配慮し、日照、天空光の確保に更なる努力を」等、景観形成基準を踏まえた助言の趣旨には程遠い回答に留まった。

市は改正景観条例や景観計画の施行前(4月前)の物件だから、全面的適用は難しいとの見解を表明しているが、

審議会答申が的を得た内容だけに、これを駆使する行政の指導性、いや行政手腕を発揮する場をつくれたのではないか。事前協議や助言は行政の責任範疇とはいえ、取り組みを振り返り、次に備えるため、経過を公開し、市民の意見を聞くべきではないか。

### 景観行政指針の不備を改め、再検討を

景観形成基準に「周辺建物群のスカイラインとの調和」が載っている。事業者が北隣建物と同じ高さに39.07mに下げたので、基準を守っていると主張した根拠とされた。行政の真意はともあれ、この表現は適切ではない。結果として高さ規制のブレーキになったのではないか。景観計画案に対するパブリックコメントでは、“周辺建物群のスカイラインとの調和”では高さ規制の指導はできないので、削除し“ケヤキ並木群との調和”や“高さ規制の数字を入れる”べきとの市民意見がありながら、これを無視して計画を策定した行政責任は大きい。

4月から、新条例・計画が稼働している中、このままでは高さ規制等に対する行政の主体性・担保性が弱く、同じ愚を繰り返すことが懸念される。この間の運用経過を考えれば、現在の高さ基準見直しは必須である。

審議会は付帯意見として“けやき周辺の景観形成に係る事項”として以下の4項目(要旨)を提起している。

- (1)景観条例・景観計画と関係法令間の連携不十分につき、現状を踏まえて整理する。
- (2)建築物で、ケヤキ並木の生育に日照、天空光、地下水減少の恐れあり、そのため建物の形態等の基準・計画づくりを継続的に取り組む。
- (3)けやき並木の日影・天空光の関係調査。
- (4)本案件は景観条例移行期であり、審議会の運営上の前例としない。



答申は現在の推進体制には不備があることを前提に、景観法を中心に関連する建築基準法、都市計画法や文化財保護法等を整合させ、総合的で、実効性のある指針づくりをと指摘したものと理解できる。良好な景観形成の骨格となる高さ・形態などの規制方法は種々あるが、近年、地域の個性を活かす景観形成を図るため、建築物の高さ規制値を導入する自治体が増えている。

出雲地方の歴史で名高い松江市では景観形成基準の工作物の高さを「地盤面から12m以下とし、かつ、周辺の建物より突出したものにしないこと」と定めている。市は審議会答申を重く受け止め、指摘検討された様々の課題について、市民対話にも配慮した取り組みを切望する。

(まちづくり・景観問題プロジェクト/2008.12)



# バス見学会 小江戸・川越まちづくり

出発するときは降っていた雨も着いた頃にはほとんど上がっていました。

今年で9回目となる「府中かんきょう市民の会」の研修旅行は昨年9月30日、40名で今もまちづくりが続けられている小江戸・川越を訪れました。

五百羅漢と江戸の面影を残す文化財の宝庫・喜多院は寛永15年(1638年)、大火によってそのほとんどを焼失しましたが、三代将軍家光が江戸城内から客殿、書院(家光誕生の間など)を移築しました。それが結果的にその後の江戸大火による焼失を免れ、江戸城唯一の遺構として現代に残されることになりました。

江戸情緒豊かな蔵造りのまち、“一番街”は遠く江戸時代より幾度かの変遷を経て今の姿となりました。



享保年間(1720年頃)、幕府の奨励で江戸には耐火建築として蔵造りの商家が立ち並ぶようになりました。当時、いくつもの街道や船運で結ばれ、江戸との取引で活気があった川越の商家もこれにならい蔵造りを建てるようになりました。

明治26年(1893年)川越大火が起こり、町の3分の1を焼失しましたが、川越の商人たちはさらに耐火性に優れた土蔵造りで復興を果たし、現在の蔵造りの多くはこの時建てられたもので、私達が見た一番街の個性あふれる蔵造りの町並みもこうして築き上げられたものです。

川越では現在も行政、地域、市民が協働して観光と商業のまちとして、まちづくりに取り組んでいます。

2年前には一番街の町並みがリニューアルされ、それまで景観を妨げていた高さ5.5mの街路灯47本を総入れ替えし、3.8mの低くてスリムなデザインにしました。赤茶けてでこぼこだった歩道は平坦な石張りに変わりました。町は明るくなり通りの眺めがスッキリして空が広がり、これまで以上に瓦屋根や黒壁の存在感が増したといえます。

伝統を守りつつ、思い切って町並みを整備することによって、さらに江戸情緒が豊かになりました。その後、中高年はもとより若い観光客も増えたそうです。

一番街を東に少し入ると“時の鐘”があります。江戸時代に建てられたものは明治26年の川越大火で焼失し、今の鐘楼はその翌年再建されたもの。現在も1日4回蔵造りの町

並みに鐘の音を響かせています。平成8年環境省の“残したい「日本の音風景」百選”に選ばれました。

昔懐かしい駄菓子店が並ぶ菓子屋横丁では川越名物の「いもせんべい」がよく売っていました。何故さつまいもが川越の名物になり、町おこしに役立っているのか調べてみました。江戸時代、さつまいもは庶民の食べ物として多く消費されていましたが、江戸時代の終り頃には江戸に「焼き芋屋」が現れ、さらに消費が増え、新たなさつまいもの生産地が必要となりました。

川越には新河岸川が流れており、川には幾つもの港があり、船運が発達していた川越は江戸との交流が深く、地の利があったため川越周辺でのさつまいもの生産はどんどん増えていきました。ただ生産するだけでなく“焼き芋用の芋”として色、形、味を常に工夫しながら作るようにしたため川越のさつまいもの品質は向上し評判となりました。

しかしこれは150年以上前の話ですが・・・、現在でも「川越＝さつまいも」と全国に知られる訳は、川越が蔵造りの町並みを大切に保存しながらも、一方では大胆に街を明るくするなどの整備を行い、まちづくりを進めたため、観光の町として大きく発展したことが大きいようです。全国から多くの観光客が訪れるようになると、江戸時代より芋の一大産地だった有利性を生かし、さつまいも商品を川越の名産品として売り出し、再び全国にその名が知られるようになりました。

今回は“蔵造りの町並み”という伝統を守りながらも、前向きにまちづくりと取り組む川越の人々の姿勢に学ぶことが多い研修旅行となりました。(佐伯郁男)

ユ一モラスな喜多院の五百羅漢に参加者の顔も思わずほころぶ(左上)  
ユ一モラスな喜多院の五百羅漢に参加者の顔も思わずほころぶ(左上)





# 10周年記念・そば打ち望年会

当会の設立10周年記念イベントとして初夏頃に企画した“そば打ち・望年会”は、昨年12月7日盛大に実施され、みんなで設立10周年を喜び合いました。この準備には多くの助力と善意があり、無事完了することができ、準備委員長を代弁して関係者に厚くお礼申し上げます。

チャレンジはまず、そのためのそば粉を「自家生産」することになり、そば栽培を“畑の学校”に委嘱されました。なにぶん未経験者の集まりなので、事例を参考にして以下の栽培日誌の如く進行しました。

## <栽培日誌>

- 7月30日(水)連日猛暑・・・そば畑(約100坪)の畝づくり。半分ほどで止める。
- 8月3日(日)晴・・・炎天下、手で種子を蒔き足で土かけ、散水。明日の応援を頼む。
- 8月4日(月)晴夕方雨・・・残りの播種、土かけ、散水を短時間で終了。
- 8月7日(木)晴・・・播種後の降雨で一斉に発芽していて驚く。
- 8月10日(日)曇・・・「畑の学校」試食会でほぼ全員集まり、そばの発芽を確認、散水。
- 8月28日(木)曇後雨・・・開花始まる。化成肥料を撒く。
- 9月2日(火)晴・・・全面に開花して美しい。畝立てしていない所は生育悪い。
- 9月21日(日)曇後雨・・・そば実が黒くなり始める。野鳥の被害多い。
- 10月5日(日)曇後雨・・・そばの黒くなった実を手摘みする。
- 10月9日(木)曇後晴・・・手摘みと刈り取りで収穫。
- 10月19日(日)晴・・・収穫(棒でそば木をたたき、落ちた実を集める)終了。
- 10月23日(木)曇後晴・・・そば実の精選、収穫量13kg(製粉して8kg)を得る。



以上、そば栽培は短期間で終る。夏そばは猛暑の中での畝立て、播種、散水作業、8月後半のゲリラ豪雨、実り期の鳥害対策等充分でなかったが、汗水たらして水補給作業をし、生産性を上げるため、手摘みまでしたそば粉であることをよく理解していただきたいと思います。

そば打ち当日は製粉されたそば粉に小麦粉を混ぜ、水を入れ、練り、混ぜ、手や棒で薄く伸ばし、細切りし、茹で上げる。これは、「府中そば同好会」の指導どおり行っただが、なにぶん素人ゆえの「不出来そば」の続出となり、時間ばかり要する羽目となりました。失敗例で多いのは均一な薄い板状にならず剥がれる、麺がボロボロ折れる、太い麺が出来るなど。特に前2者は、そば粉の質が悪いと指導員に判定され、どう悪いのか、未熟種子だったのか、実の乾燥が足りなかったのかそこの説明がなかった。反論するつもりはないが、試作時につなぎ不足が判明するはずだから、その解消手段を講じるべきであったと主張したい。

麺の形や長短をよそに、自分たちが苦労してつくったとの意識が強いのかみんな笑顔で美味しそうに食べていた。よかった！よかった！

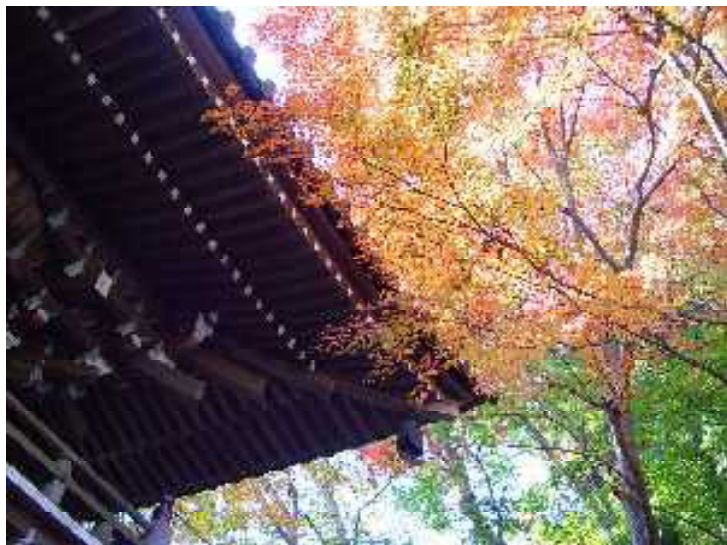
望年会で景品として提供したハクサイ、キャベツなども“畑の学校”の仲間が、猛暑の時期に種まきし、水遣り、間引き、草取り、施肥など愛情一杯で育てた自慢すべき「生產品」でした。(“畑の学校”の 自称校長 竹田 勇)



気分は「そば屋」の亭主？(上)。不揃いも愛嬌のうち？(下)。出来、不出来は別にして格別の味だった「畑の学校そば」(左)・・・右側は「畑の学校」への用地提供者、田村さん。



# 樹木観察会 高尾山 紅葉狩り



11月25日の樹木観察会は紅葉の高尾山です。天気はまずまずなのに高尾山駅前はそれほど混雑していません。10時過ぎに一行8名は、ケーブルで山上駅に向いました。

駅前の小さな広場で、今日の話題として ①高尾山の北斜面と南斜面の植生の違い ②紅葉・黄葉・褐葉のできる仕組み ③カエデ科植物の特徴などを一通り解説しました。そこから小さな階段をのぼると、カエデ科のメグスリノキがあります。いつも見事な紅葉が見られるのですが、今年は若干時期が早すぎたのか、まだ半分くらい緑の葉が残っていました。以前に比べて高尾山の紅葉の見頃は次第に遅くなっているように感じます。これも温暖化の影響でしょうか。

「もみじする」という言葉は秋に葉が紅や黄色になる現象をいい、カエデ科だけでなくウルシ科・ブナ科・スイカズラ科など様々な落葉樹が含まれます。丁度ブナとイヌブナがほどよく黄葉(褐葉)していました。両者はよく似ていて区別がしにくいのですが、イヌブナは肌が黒っぽくザラザラしていること。樹の根元から沢山の”ひこばえ”出ることで違いがわかります。

ほどなく仏舎利塔のある広場に立ち寄りしました。ここはイロハモミジやオオモミジが沢山あって高尾山では紅葉のポイントの一つです。いつもはカメラマンが沢山いるのに今回は数名しか見られません。今年の高尾の紅葉は色がなんとなくくすんでいて、いま一つパツとしないからなのでしょう。秋になって降雨が多く、晴天が少ない年は美しさが劣るといわれています。私の経験でも美しい紅葉は数年に1度しかないという気がします。

薬王院の裏を抜け、山頂下のベンチのある広場で昼食をとりました。コナラなどの高木の下に、黄葉したシラキの樹が沢山みられました。シラキはよく陽が当たる場所では美しく紅葉するのですが、今回は残念ながら真っ赤な葉は見られませんでした。

うす曇りで富士山の展望が期待できなと思われたので山頂を省略し、尾根の北側をいく4号路を通りました。吊橋を渡り、イヌブナ・ホウノキ・アワブキなど温帯林の黄葉(褐葉)の林を眺めながら歩くとほどなくケーブル山上駅に到着。感動するような紅葉は見られなかったけれど森のフイトンチットで心身ともリフレッシュした一日でした。

(野口道夫)



薬王院の紅葉(上)と登山道のブナの紅葉(下)  
--お断り-- 2008年の紅葉ではありません

## 樹木観察会について

樹木観察会は「身近な樹木の名前を覚えたい」という会員の声を受け、平成16年6月から東京農工大の構内をフィールドとして毎月1回実施してきました。解説がマンネリ化するのを避けるため、樹木を観察する視点を変えるなどいろいろ工夫してきましたが、同じ所で観察会を続けるのは(調査ではないので)限界があると感じておりました。

そこでこのたび、思い切ってフィールドを近郊の都市公園や自然公園まで足を延ばすことにし、散策を楽しみながら観察をすることにしました。しばらくは春秋に年4回程度のペースで試行してみようと思います。(予定はホームページに掲載します。)

観察会は当会の事業ですがどなたでも参加できます。ただし障害保険には入っておりませんので行事中の事故は自己責任で、また資料準備などのため事前に申し込んでいただくようお願いします。



## 新春 酔談

### [松のこと]

唄の文句にありましたな。「松になりたや有馬の松に 藤に巻かれて寝てみたい」(有馬節)とか、「関の五本松一本切りや四本 あとは切られぬ夫婦松」(美保関民謡)とか。酔って唄えば、松が人間か人間が松か。判らねエのが粋なところ。

松と云や、府中の町では正月門松ナシ。竹だけ立てる。ムカシ大国魂の神サマが、「わしゃマツのはいやじゃ」と、云ったとか云わないとか・・・。

松の木に限ったことじゃない。そもそも日本人は、樹木や森や林に「こころ」でかかわって来たんじゃないかい。ある時はおそれ、ある時はつつしみ、そしてある時は信仰とね。今時は、そんなこと旧いと一笑される。そんなら、今時のシゼンカガク的な共生への呼びかけは、どれほど人々の、共感を得ていると言うのかね。

開発しては植栽で誤魔化され、その樹が茂れば日陰だ落葉だと騒ぐ。共生などちっとも浸透してはおらんではないか。アプローチの巾が狭いんだな。

もともと環境破壊は人間の自然に対する優越感から始まった。そこの所をどう修正するか。科学知が優越感のもと。ならば、「知」に訴えるだけでは、間に合わんのじゃないかね。

自然の恐ろしさから隔離され、保護されることに馴れてしまった今、肌身に沁みてそれを感じさせる手立てを探さなきゃ。

### [七草のこと]

七草粥は、若菜を食べて、生命力を若菜のように蘇生させたいと云う、農業に関わる信仰がもとじゃな。だから「七草なずな唐土の鳥が・・・」と云う「七草ばやし」は、農作物に害をあたえる鳥を早起きして追い払えと唄っている。

そう言えば、あのヒヨドリという鳥も、朝早く来ては、庭の赤い実を遠慮なく食べやがる。畑のキャベツやホウレン草もと言うから、早起きして追っ払わんならん。野鳥クラブの人には申し訳ないが、まっこと憎っくき奴なのだ。

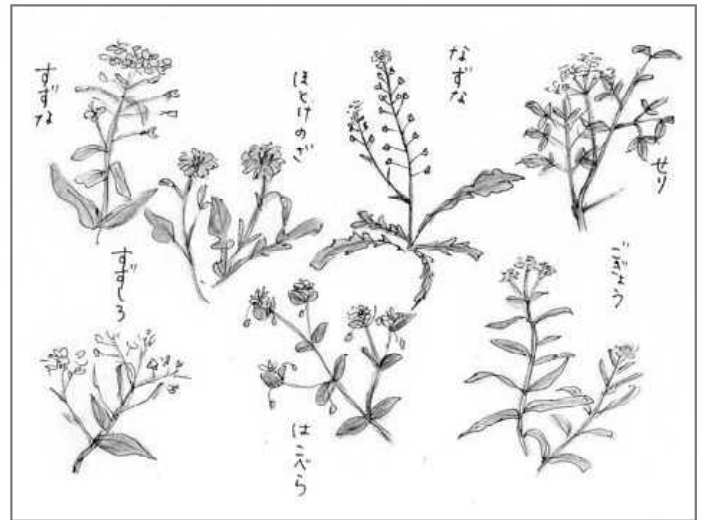
で・・・、七草のことじゃが、此の頃はスーパーで七草を売っているのを見かける。あれでは、野に出て若菜を摘む「農」の思いには無縁だ。まあ、何であれ、先ずは伝統行事に手を染めてみるのは、悪いことじゃねエ。

しかし序でに言っとくが、此の頃の「七草ばやし」はこうだ。・・・「せりなずなごぎょうはこべら母縮む、ほとけのぎすずなすずしろ父禿(ち)びる」・・・コン畜生。だからスーパーの七草なんてロクなもんじゃねエ。

「君がためはるの野に出でて若菜つむ

わが衣手に雪はふりつつ」(光孝天皇)。

昔は天皇サマでさえ、大切な人のために、雪の降るなかで若菜を摘んだというのに・・・。



### [サブプライム生態系]

ある人が佐久間象山に聞いた。「先生、金持にはどうしたらなれるかね。」象山先生、「そんなことたやすい。片足あげて小便しなさい。」

聞いたほうビックリ。「それじゃまるで犬みたいじゃ。」先生「さよう人間らしくしては、金持にはなれません。」これホンとらしい話。

自由競争原理の行き着く先を想像できず、自分の力で制御できなかった欲望人間は、金持にはなつただろうが、今じゃ、その片足上げて小便している犬だね。自由競争で貧困のどん底に落ちた人を、「負け組」と一蹴する心の貧しさ。これも「金融工学」信仰の哀しい馴れの果てじゃ。

環境問題も、生態系だ、生物多様性だと、「知」をもってするのはいい。だが人間が、その何処に居させて貰っているか、謙虚に自覚する事無く、科学知一辺倒で騒いでも、今に皆がローンに行き詰まるワ。

考えてもみな、今この地球上から人間が一人もいなくなったとして、この地球と、その生き物達の誰が困るというのかね。ホモサピエンスという、生息最多頭数の動物がいなくなっても、地球の生態系は、涼しい顔で、生き生きと廻り続けることだろうよ。嗚呼、酔いが醒めてきた。

他愛もない酔い語りこれにて。燼坊椀島蒙御免。

(燼は余燼の燼にて、日ク燃え差しにござんす)